

佳作

深くて温かなヤサシサの中で

東京都 桜修館中等教育学校一年 佐藤 榎音

知らなかった。自分がこんなにも温かい優しさの中で生活していたなんて。

私は小学六年生の頃に、「有痛性外脛骨」というものを発症した。この病気を治すために私は、長い時間をかけて手術やりハビリに取り組んだ。治療期間中は松葉杖や車椅子での生活だったため、自分一人だけでは思うように動けず、他の人達の支えが私の生活には必須なものだった。

学校に行くのも一苦労。親の送迎が無ければ登下校はできなかった。階段も、先生に付き添ってもらいながら上り下りをしていった。友人にも様々な場面でサポートしてもらっていた。そこで私がとても肌で感じられたことは、「友人の優しさ」だった。こちらが頼んだ事やお願いした事は快く引き受けてくれた。しかし、それだけではなく、提出物や配布物

を私の分まで持ってきてくれたり、自然と私のカバンを持ってくれたりしたのだ。友人達は、様々な場面で私にも気を配ってくれ、自らサポートしてくれた。それは友人だけではなく、親も同じだ。毎日の送迎、週一回の遠い病院への通院など。改めて自分はどんなに周囲の人々の助けを受けて生活しているのかを実感させられた。

私は、この有痛性外脛骨の原因となる足の外脛骨が両足にあったため、半年程は松葉杖や車椅子を使っていた。つまり、周りの人達にもそれと同じ位助けてもらっていたということだ。最初はただ「申し訳ない」と思っていたただけだったが、その気持ちは徐々に変わっていった。今まで自分が体験したことが無い程の深い優しさの中で生活する内に、少しずつ惨めな気持ちになっていった。それは日に日に強くなっていっただけだと思う。一度、母の前で溜まっていた気持ちが爆発してしまい、自分の思いを号泣しながら話したことがある。人が支えてくれるのは嬉しいが、やはり申し訳ないという気持ちが勝ってしまうということ。これ以上周りの人に迷惑をかけたくないのに、そんなことができるはずもなく、毎日負担をかけてしまっていることの情けなさなど。

私の言葉を母は静かに聞いてくれた。そして、

「あなたは何も考えなくて良い。私達は少しも負担に感じてないし、迷惑だなんて思っていないから。」と優しく言ってくれた。短い言葉だったが、それだけで私は今まで心の中で固まっていたしこりがすっと消えた気がした。知らなかった。自分がこんなにも温かくて深い優しさに包まれて育ってきていたなんて。そう思うと、とても心が熱くなった。

私は、自分が思っているよりもっと深い優しさの中で育っている。優しさにも、言葉で寄り添う、行動で支えるなどの様々な種類があると思う。確かなことは言えない。しかし、そのような周りの優しさに気付き、些細なことにも感謝し、他人にも目を向けられれば、自分も人に優しさを持てるようになる気がするのだ。